

平和とは、「戦争が無く世が安^{あんのん}穩であること」と辞典にあります。今や、国際法上の戦争が無くても、テロリズムなどの脅威や紛争などにより、^{おだ}穏やかでは無い環境にある人々が世界中にはたくさんいます。

日本でも、憲法の解釈について多くの議論が^ま捲き起こり、心^{おだ}穏やかでは無くなり、今は本当に平和なのだろうか、と疑問を持つ方も恐らくおられることでしょう。

平和という言葉は、戦時中も用いられていました。「東^{もち}洋^{とうよう}平和の建設」という戦争の目的に取り込まれ、平和は戦いの末^{すえ}に生み出すものであるとされました。それが大きな^{あやま}誤りであったことを私たちの先人は学んだのですが、戦後七十年の今、経験から教わることは^{むずか}難しくなっているようです。

先の大戦が終わって八年八カ月後の昭和二十七年四月、日本が主権を回復した時、当時の曹洞宗は「^{しょうほうにほんけんせつうんどう}正法日本建設運動」という目標のもとに、「^{かか}明るい日本 ^{かか}正しい信念 ^{かか}仲よい生活」というスローガンを掲げました。“^{あそ}明るく暗い影がない、^{いっぽうかたよ}どちらか一方に偏らない、^{わごう}和合して互いに^{あそ}争わない”と、平和をつくり出すために、心の迷いを離れ、^え安らぎを得て、^{ふっこう}精神を復興することを^{ふきょうきょうか}目指した布教教化を展開しました。

そして、平成十九年十二月八日、曹洞宗は過去の戦争協力についてのお詫びの言葉と共に、お釈迦さまのみ教えである、「^{せつしょう}生きとし生けるものを殺さない」ことと「^{せつしょう}殺生をしないという決意」を守り、平和な社会を実現するため、「^{ふせん}戦わない」という「^{ふせん}不戦の誓い」を発信しています。

この「^{せいがん}不戦の誓い」は、仏教教団ならではの重い誓願です。戦いは、争い合う両者が傷付くことでもあります。出来る限り戦争はしたくないのはどこの国でも同じです。ましてや、よその国の命令でするものではないでしょう。

今こそ、真の平和のすがたである、世の中が安らいで、^{ふせつしょう}穏やかであるために、お釈迦さまがお示しになった「^{ふせつしょう}不殺生」、「^{ふせつしょう}生きとし生けるものを殺害しない」ことと、「^{ふがいかく}不害覺」、「^{いまし}他を傷つけないという決意」を自らの^{いまし}戒めとし、平和を望む者としての立場を明らかにしなければならぬ時なのではないでしょうか？

— 終 —